

抑留中の苦勞調査表

愛知県 水野朝之

一、出生

- ① 出生地 愛知県西春日井郡豊山町豊場字中之町
- ② 出世時 大正十四（一九二五）年十一月二十三日

日生

- ③ 学歴 愛知県岡崎市 愛知県立岡崎工業学校
機械科卒業

二、ソ連軍侵攻前

- ① 入隊 昭和十九（一九四四）年九月二十日
- ② 入隊集合場所 北海道旭川市 北部軍第七部隊
(工兵隊)
- ③ 入隊場所 満州ジャムス市 関東軍ジャムス師
団工兵隊 満州第七三三部隊
- ④ 初年兵教育 三カ月後、幹部候補生合格
- ⑤ ジャムス師団主力部隊、台湾方面出動（昭和十

九年十二月）私は候補生として残留。

- ⑥ 甲種幹部候補生に合格（昭和二十年四月一日）、
兵長に任命

- ⑦ 昭和二十年五月一日 伍長に任命

- ⑧ 派遣 満州チチハル市

チチハル工兵予備士官学校入校（昭和
二十年七月一日）軍曹に任命

三、ソ連軍の侵攻をどこで受けたか

- ① い つ 昭和二十年八月十日

- ② どこで フラルギー（チチハル市北方） ノン

江（松花江の支流）

- ③ どんな状況で

イ ノン江（川幅約一キロ）での渡河演習中

ロ 急ぎチチハル候補生教育隊に帰隊し（八月

十一日）、チチハル防衛の任命を受け、現地召

集者の応援を受けて師団司令部付近に対戦車

壕を掘り、築城を行いながら、数回にわたり

飛来してきたソ連空軍に対し、対空戦を行う。

ハ 八月十四日 千チハル放棄、撤退

日本人街、各部隊、橋、鉄道等すべての施設が爆破された。

残りの黄色爆薬を積み、無蓋貨車の爆薬上に乗って千チハルを放棄撤退した。いつまでもいつまでも真つ赤に燃える千チハルの街の炎が印象に残った。

ニ 八月十四日、ハルピン防衛の任命を受ける。
(爆薬列車上に於て)

四、終戦

イ 詔勅(八月十五日午後五時頃) 爆薬列車上でハルピン駅に到着したが、駅内は引揚者列車で混雑していた。我々は師団司令部の特別任務を持った隊の列車でしたので他の列車は直ちに排除され、ホームに入りました。私の止まったホームはちょうど、伊藤博文公の銅像の横だった。(ここは伊藤博文公が暗殺された場所です) すぐ、朝日新聞の号外を受けて詔勅を謹んで拝読

した。

ロ 感想 その時は余り実感がなかった。朝日新聞の号外も日本が負けたと、はっきり書いてない。隊長に質問しても「くわしい事は分からない」と言われ、同僚と話し合っても、誰も日本が敗れたとは思っていなかった。私は詔勅を何度も読んで、その真の意味を知ろうとしたが、敗戦という実感がなかった。私は、その当ても日本は必ず勝つと信じており、天皇陛下のため決死隊になって、いつ死んでも本望と思っていた。

ハ 終戦 ハルピン駅の近くの日本人小学校を宿舎として、ハルピン治安維持の任に当たり、私どもはまだ完全武装しており、度々出動した。その間、現地から何もかも放棄して逃げてこられた婦人や子供さん等が我々の小学校宿舎に入ってきた。我々と合同の宿舎になった。「日本はどうなりましたか、私たちはどうなるのでしょうか」と問われても、答えようもなかった。

街は小銃や機関銃音がひっきりなしにしており、また日本人街に満人の暴動があると「すぐ出動せよ」との命を受け度々出動したが、満人は逃げた後で誰もおらず、ただ犬や猫が放し飼いになっただけで、室内に入ると、立派な日本製のたんす等が開けられて、嫁さんや子供さん等の晴れ着が散乱しているのを見て、同僚の候補生と話し合い、日本はどうも負けたようだ と推測するようになった。その間に候補生がピストル自決をした。

二 武装解除

a 八月二十日、司令部の命を受け、ハルピン競馬場まで行き、自主的に武装解除をした。山と積まれた武器の前で、押しただいて自分の武器に敬礼をしてお別れをした。

b 武装解除を完了して、ハルピン郊外の香坊の砲兵隊の空兵舎に行き、持てるだけの食糧を持って外へ出ると、ソ連兵が来て、いきなりマンドリン銃を我々に突きつけて歩かされ

た。

c 八月二十一日、ハルピンを發してマンドリン銃のソ連兵に警戒され、海林收容所に向かう。途中、ソ連兵に腕時計を無理矢理に取られた(全員)。ソ連兵でも頭を丸坊主にした兵で、何かの罪を犯している程度の低い狂暴な兵だった。分捕った時計を十数個もぶら下げ得意になっていた。

d 九月三日、海林收容所出發↓牡丹江へ約一カ月歩かされた。その間、激戦地を度々通過した。多数の我々日本人の兵隊が戦死され、腐敗し、蛆がわいて放置されたままの所がある。我々はどうすることもできず、ソ連兵にせきたてられて歩かされた。また、終戦を知らない隊が山中に立てこもり、ソ連軍の砲撃を受けていた場所もあった。途中、水筒の水がなくなり、泥水の溜り水を皆が競って水筒に入れ、私もこれを飲んで歩いた。私は腹をこわしてしまい、下痢をして脱水状態になり、

皆について行くのがやっとだった。

e 十月七日 牡丹江着

f 十月十五日 身体検査を受ける。私は衰弱していたので候補者隊と分離され、牡丹江收容所に残留となり、候補者隊は入ソしてシベリアへ行った。

g 十月十五日 牡丹江收容所第一大隊に所属、第二小隊長をさせられる。

h 作業内容 牡丹江（旧陸軍）病院内の雑用と死亡者の遺体を埋葬する仕事をする。我々が埋めた遺体を冬になってから（昭和二十一年二月頃）ソ連兵が別の抑留者を連れてきて掘り返し、トラックに積み込んで持って行った。

五、シベリア抑留所へ移送

①昭和二十一年四月二十一日

私どもは健康を取り戻し、四月二十日身体検査を受け、約三百人の隊員に編成され、私はその三

個小隊の第一小隊長にさせられた。そして牡丹江の駅から、コウリヤンの藁を敷いた牛馬用の有蓋貨車に乗せられた。

②約十五日間、貨車の中の生活で、途中、山中の引き込み線で十日位停車していたことがあった。食事はアズキが主食で、生ニシン一匹を与えられ、十日位、朝、昼、夕食、共にその状態にされて、足が上がりなくなった。

六、抑留所の生活

①各地の收容所に転出入した。

イ 第一次收容所

昭和二十一年四月三十日～八月二十日
ブヤンキー山中收容所

約五百人の所へ我々三百人が転入して、計八百人の收容所となった。

ロ 第二次收容所

アントノフカ山中收容所

昭和二十一年八月二十日～昭和二十二年四月

まで約二十人の長として転入した。

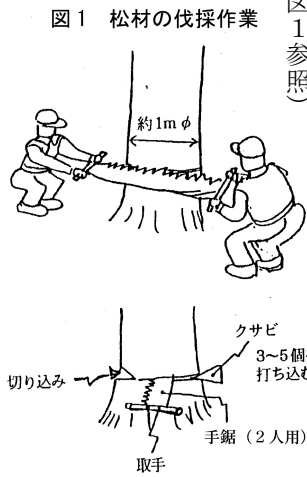
ハ 第三次収容所

スイソエフカ山中収容所

昭和二十二年四月〜二十三年九月十日

②作業内容

イ 約九五センチメートル〜一メートル十センチ直径の松材伐採作業、枝は全部取り去り、表皮は全面はがし、切り株の表皮もはがし、枝や皮全部を燃やす。長さを四メートル〜五メートルに切断。直径一メートルの大木の伐採作業は二人で行う。手鋸を行い、倒れる方向に切り込みをつけ、鋸が中央近くから食い込まれて働きが重くなるので「クサビ」を打ち込んで切っていく。(図1参照)



分隊長はクサビを打ち込む位置や、切り込みの位置で倒したい方向に倒れるように工夫する。大木が倒れる時は、三メートル位倒れる方向に飛んで地面に落ちる。その時は地響きして震動が地面から伝わってくる。大木の全長は、三十メートル〜四十メートル位になるので、倒れる前に人がいないか十分に気を遣う。そして倒れる方向に向かって「倒れるぞ！」と大声を出す。倒す時はクサビを一気に打ちこむ。

ロ 切断木材の移動

搬出道路予定地の脇斜面上部にトラックに積み込みできるように(図2参照)積み重ねる。

ハ トラック用道路の新設作業

図2のごとく山の斜面を削り取り道路を新設する。

図2 道路作業

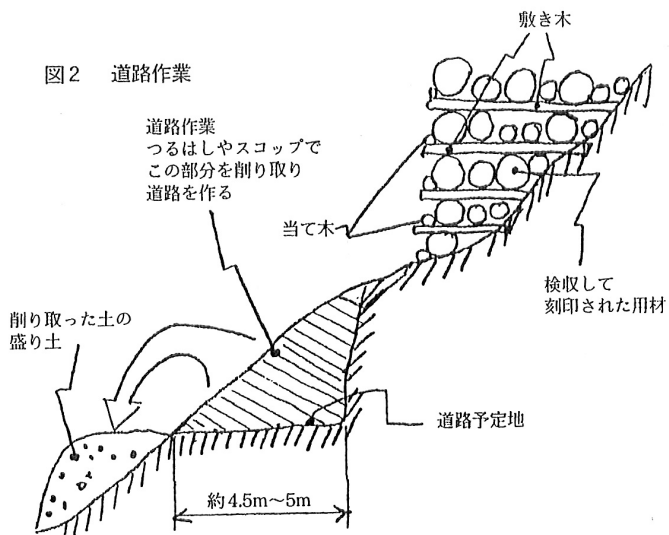
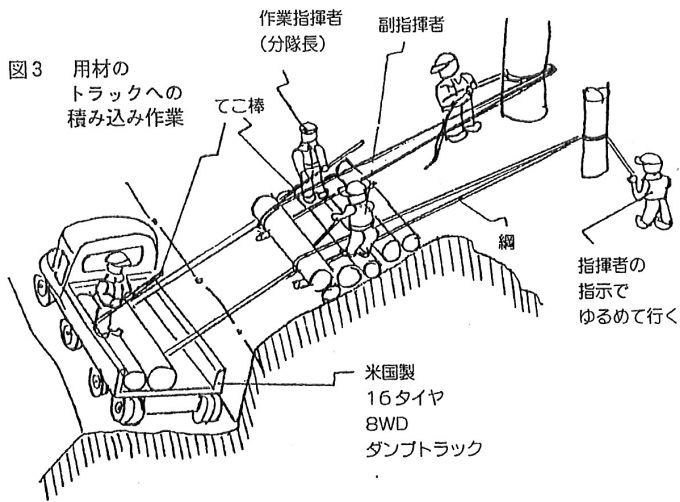


図3 用材の
トラックへの
積み込み作業



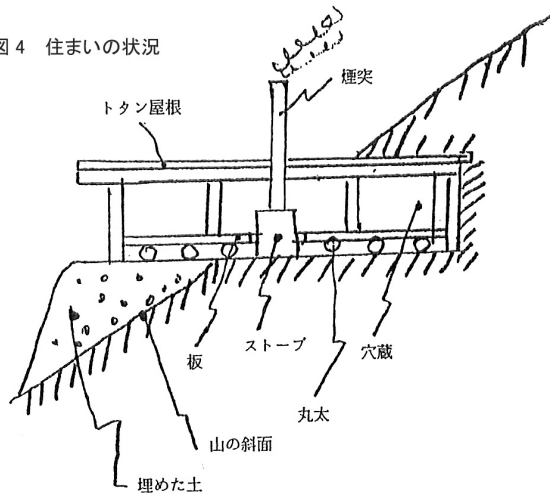
二 トラックに原木材を積み込み作業、図3のごとく行う。(図3参照)

③住まいの状況

イ ブヤンキー山中収容所

山の斜面を横掘りにして横穴の穴蔵を造り、前方に埋め立てた土の上をトタン屋根で蔽い、中央にストーブを置く。(図4参照)

図4 住まいの状況



そのため、冬は午後四時頃、朝は午前八時頃まで真っ暗な時に夕食、朝食となるので、松ヤニのある松明を前日に準備しておいてその明かりで食事をした。そのため松明の煙で顔や服が真っ黒になり、目と歯だけが白く、黒人同様となった。そのような環境のため、後述しますが、作業員の気力を失う要因の一つとなった。

ロ アントノフカ山中収容所

建物の真ん中に通路、両脇に二段式の板張り、下に毛布を敷き上にも毛布をかけて就寝できた。

通路の両脇は出入り口でその近くに計二個のストーブが備えてあった。けれども電灯はなく、ここでも冬は松明で食事をする事となった。

ハ スイソエフカ山中収容所

最初はアントノフカ山中収容所と同様の住まいであったが、途中より民主運動による改革によってノルマの過剰な達成によって得た報酬で、製材した木材や金具等を購入して休日に新築したり改造したりした。また、蒸気機関や発電機も購入し

て電灯を灯し、室内は石灰液を塗り白壁にして明るくした。

④ノルマの有無

イ ブヤンキー山中収容所

ロ アントノフカ山中収容所

両収容所とも当初ノルマは午前中に七〇〜八〇%までできたので、午後は雑談等で過ごしていた。けれども、後述するように作業員の気力が段々失われ作業ができなくなった。

ハ スイソエフカ山中収容所

抑留中に全く作業ができない極限状態に落ち込んで非常に困惑した。そのことについては末記に詳述したので省略する。

⑤衛生状態

イ ブヤンキー山中収容所

昭和二十一年四月に私ども三百人は、五百人のブヤンキー山中収容所に編入された。間もなく全員が悪性のアメーバ赤痢になってしまい、血便状態になり脱水症状となり衰弱して死亡するという

悲惨な状態におかれた。以上のことについては末記に詳述したので省略する。

ロ アントノフカ収容所

建物の内壁にシラミがいて、私どもが編入されるとすぐ私どもに移り、体中が痒くなり悩まされた。衣服を脱いで見ますと、シラミがぎつしりと列をなしているではないか、驚いた。一カ月に一度、衣類の蒸気消毒があるが、建物に付着しているのですぐ移着する。焼け石に水だった。入浴も消毒の時にドラム缶風呂に入ったが、体中が松明の油煙で真っ黒の体で何人か入るので、真っ黒などろどろした湯だった。また、風呂場も周囲が板やトタンで囲われたお粗末な簡易構造の小屋だった。ここでも健康診断は一度もなかった。

ハ スイソエフカ山中収容所

当初は前項アントノフカの所と大差がなく、シラミに悩まされた。蒸気消毒も入浴も一カ月に一回または二回程度行われたにすぎない。けれども、後記に詳述するように収容所内の民主活動の革命

があつて、ノルマの異常な上昇に伴い、その報酬による資材購入と我々の休日作業で設備の新設改造を行い、衛生状態は飛躍的に改善された。電灯による照明、石けんによる衣類の洗濯、蒸気消毒、大きな浴場も造り、ほぼ満足な生活ができるようになった。初めて人間らしさを取り戻した。けれども、昼間は三〇〇%の作業で働き、夜は遅くまで洗脳教育、休日返上して設備の改善と働いてくると心身共にくたびれ、皆、民主化運動の圧力に振り回され、それに屈してしまい、何が何だか分からず夜はぐっすり眠るのですが、何か不満が残った。

⑥作業能率を向上させた工夫

松材を伐採し、表皮を全面はがして、道路または予定道路の脇斜面上部にトラック荷台に積み込みできるように敷木を置いた上にそろえて積み重ね、ソ連検査員の山男に検収刻印を押させて、当日の伐採した仕事量として計上されて作業が完了する。本口が平均で一・二メートル、末口も〇・

八メートルもある大木で、長さ四メートルの生木です。二トンから二・五トンもの重さになる。

その運搬は技術と熟練及び掛け声で一致した行動がとられる隊員の人数が必要である。入ソした当時は何の説明も指導もなく苦労した。特に山の斜面での運搬は、立木が所々あり、失敗して大木材の下敷きにでもされたら大変である。また崖の谷に落としてしまつては元も子もなく、非常に危険な作業である。当初は材木に綱をつけて引張っていたが、切り面が地面に削り込む。てこ棒で上方へ浮き上がらせて引張っていたが時間がかかり、先端の下方になる部分を斜め切りして丸く面を取つてみたが、これまた時間がかかる。何か良い方法はないものかと考えて、図5のごとき運搬用轆を考案した。これは堅木から手斧の手作りにより製材し、反りの部分は火で焼いて曲げた。また轆と横桁との接続は山男に頼んでボルトとナットをもらい、一号機、二号機、三号機まで造つて用いた。使用する場合は、図6に示すように材木

の先端部分を橇の上に乗せ、橇と材木とはロープで固定し、引っ張り用ロープを材木と橇の両方へつけて引っ張ると、よく滑り動くので、雪の降った時には運搬しやすく、雪のない夏期でもよく機能して運搬作業は飛躍して向上した。

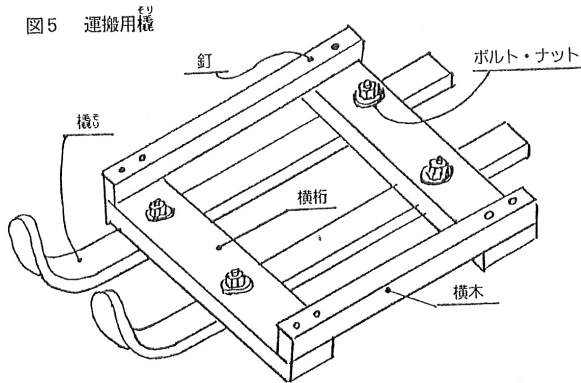
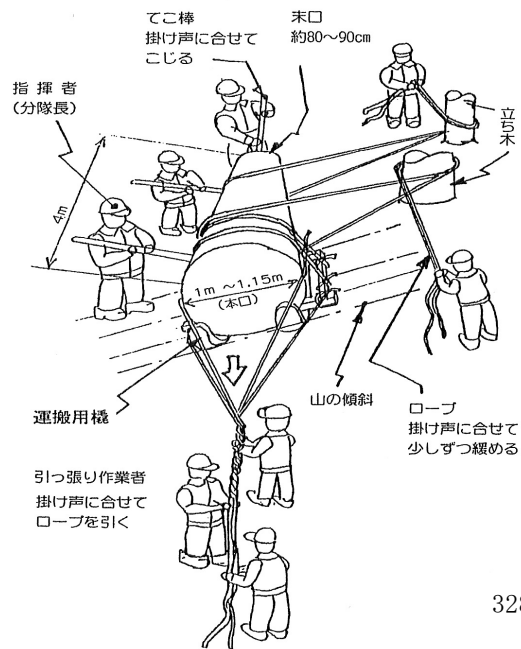


図5 運搬用橇

図6 用材の運搬（移動）作業



⑦ 抑留中の娯楽について
 イブヤンキー山中収容所
 ロアントニフカ山中収容所
 両収容所とも色々な方がおられて噺家とか落語家のようにお話のうまい人や歌の上手な方が、昼休みや当初はノルマが早く完了し、体もそんなに疲れておらず午後の一〜二時間とか夕食後の四十

分位の時には以上の方々の演出、演技によって皆、堪能し、とても楽しく充実していた。

例えば落語家の場合は、すし、おはぎ、みそ汁等々、現在の抑留中に味わえない日本の食べ物について手や口を使い、顔の表情や動作が面白く、おかしい話ぶりに皆聞き入って、一緒にどつと笑い、また静まったりして、心の中まで刺激を受け、日本内地の様子を食事から想い出させた。またエロ話を、例えば結婚初夜の話を微に入り細にわたって話され、アンコールを何度もして、よく聞かされた。また歌の上手な方もおられ、そのすばらしさに心を奪われ、うっとりとして快い気持ちになる事もできた。けれども段々と話の種もつき、演出される方も昼間の山仕事で疲れ、新しい構想を考えられる環境でないので自然となくなつた。

ハ スイソエフカ山中収容所

以上の演出や演技を皆楽しんだ時も過ぎて、前述したように各個人が飯盒に水増しして重湯状にして、熱い重湯で腹いっぱいにして満腹感を味わ

うようになり、食道を痛め、栄養失調から気力を失い、娯楽どころではなく最悪の状態であった。

その状態から民主運動で収容所内革命があり、ノルマの異常上昇となり、その報酬と、我々の休日の労力で収容所内設備の新設、改築、改善等を行い、完成した後は劇団が編成され、ギター、アコーディオン等も購入して、日曜日の午後はその演劇を屋外劇場で鑑賞することができた。例えば地主とか小作の芝居が延々と上演された。またノルマ上昇の報酬で小麦粉、小豆、砂糖、醤油等を町から購入して、小麦粉で作った「みたらし団子」「ぜんざい」「おはぎ」等を引換券を配り屋台店を作って、そこでそれらを貰い頬張りながら劇を鑑賞した。これらはすべて日曜日の午後に行われた。平日は三〇〇%の仕事、夜は遅くまで洗脳教育でくたびれ、皆午前中は朝食後寝るのだが、芝居の演出関係者や屋台店の関係者は準備や稽古で大変であつたと思う。けれども、一般隊員はたしかに楽しみが増えた。また一方、このような劇で自然

に洗脳もされた。

七、抑留中の規律

①昭和二十二年末までは

イ 「日本軍は解散していない」と抑留者代表の少佐の方から毎回話があった。
ロ 毎朝宮城遥拝、天皇陛下万歳を唱えて朝礼を実施していた。

ハ 今週の着眼項目

「敬礼の厳正」等旧軍隊のまま行った。

ニ 階級章も着けたままいたが、昭和二十二年八月頃にはつけていない人もあった。

ホ 昭和二十二年夏頃より末期の極限状態で、詳述するように作業員が氣力を失い、規律どころではなくなった。

②昭和二十三年四月頃より

後述するように民主運動が起こり、今までの旧軍のやり方の規律が崩壊し、全部廃止、新しく選挙を行って作業長（従来の分隊長）、小隊長及び収

容所代表等が選出された。民主運動の活動をしている人達が各長に選出され、新体制のもとで何事も行われるようになった。

八、抑留中の極限状態

①分隊長、小隊長の主な業務

伐採作業も三年目になると、作業要領もわかり、充分慣れてきた。分隊長は明日の切断木を選び、手間のかからない材木に目印をつけ、どの方向に倒して、道路予定地にまでどのように運ぶか目安がつくと、斧で材木に目印をつけておく。新しい山に入った時は木が多くあるが、木がなくなると来ると手間のかかる木のみが残るので、分隊長同士で争いになり度々仲裁をした。また私は、山男（ソ連の検査員）を連れて今日の作業現場に案内し検査をさせる。山男は末口に刻印を押して、末口の直径と長さを計り、表から体積を出して記録していく。作業は分隊長単位で計算され、切断量（平方メートル・リユーベ）とノルマ達成率何%

が計算される。分隊長は安全には充分気を使って作業を進める。

② 一般作業員の状況

いつ帰れるかわからない状態で、人里離れた山奥に強制的に抑留され、労働させられ、娯楽もなく、女性を見ることもなく、また自分の仕事の責任を問われることもない毎日の単調な日が過ぎて行くと、人間はある種の欲求不満を満たすために何か変わった刺激を求めるようです。それが我々の収容所では、配られた食物に水を増して色々な木や草の若芽、新芽をつまみ、これを入れて煮込んで熱い重湯状になったのを夕食時に作り「フウフウ」言ってすすり飲んで（お酒を飲んでいる気分かな？）満腹の満足感を味わって就寝するのが唯一の楽しみという状態が始まった。初めは他の小隊ではやり出し、全収容所のほとんどがそれを行うようになった。私らはその行為は精神的不満の心が癒されているように思い、またその位の楽しみがあっても良いのではないかと小隊長同士

で話し合っていた。ところがそうではなく、胃拡張と食道の内壁を侵し、食物の栄養を吸収できなくなり、栄養失調症を招き、逐次体力が落ちると共に気力を失ってきた。

③ ノルマの達成ができなくなった。

このように気力を失うと仕事どころではなく山へ歩いて行くのがやつのことで、山へたどり着いても仕事ができなくなった。ノルマ三〇%を割ると食事が与えられなくなるので、私と分隊長及び数人の気力のある者とで何とか三〇%台を確保した。

④ 次々と死亡する者が出た。

このように気力を失った状態になると、朝なかなか起きて来ないので「おい、朝だ、飯だ」と揺り起こすと、すでに死亡している状態であった。こんな状態の悲しい思いを重ねた。

⑤ ノルマ五〇%を割ると小隊長は夜のみ営倉に入れられた。

昼間は山へ行き、夜は夕食を除かれて営倉に入

った。ノルマ五〇%を越えるまでその状態であった。営倉は、我々日本人が立ってやつと入る寸法に造られたロッカー状の箱になっていて十個ばかりあったが、毎夜満席で、七人の小隊長共々連夜入って来て、ノルマ達成は収容所全体ができなくなってしまう。

九、収容所内の革命

①「日本新聞」

スイソエフカ収容所に転入（昭和二十二年四月）してしばらくして、ハバロフスクから「日本新聞」の発行されたものが山中収容所にも配布されるようになり、初めて見る活字に皆一様に関心を持ち、食い入って見るようになった。特に生きているか死んでいるかわからないような気力を失った隊員も、少しずつ目覚めて来て「プラウダ紙」より収録された一方的な新聞だが、世界の情勢、日本国内の状態、日本の各地の有様等が報ぜられているので、皆一様に興味を示し、又、楽譜付きの歌を

歌う隊員も出て来て、赤旗の歌やメーデーの歌も歌うようになった。又「マンガ」もあったので皆、日本新聞（週一回の新聞）が来るのを心待ちして望むようになった。

②民主活動セミナー受講者が収容所に帰所。

そんな折、ハバロフスクの民主活動の中央本部より、受講の代表を三人出せとの指示があり、指示された年齢の若い隊員三人が選ばれて収容所を出発した。三カ月ほどしてその三人が洗脳教育を受けて、大きな赤旗を捧げ、大声で赤旗の歌を歌い、闊歩して収容所へ入って来た。もちろん日曜日の休日で、事前に連絡があり、全員で出迎えることになっていて拍手の中へ帰って来た。

③将校さんのつるし上げ

直ちに広場に設けた演台上上つての帰所第一声が「我々は人生の師である『ソビエト連邦人民共和国』の偉大な国に居住させていただき、しかも偉大な国の国家的作業の伐採部門の最先端を任せられた幸せに恵まれているにもかかわらず、ノルマ

達成率が収容所全体で五〇〜六〇%の低い率で放置され、我々人類の師であるソビエト連邦人民共和国の恩恵に対し、それに応える姿勢がない。各自全員反省せよ。その責任者である将校連中をここへ引きずり出せ」ということになって、将校さん十六人をつるし上げる事件が発生した。将校さん達は壇上に立たされた。「軍隊はなくなっているにもかかわらず、それを長いこと我々にいつわり、毎日、碁や将棋をして遊んでいではないか。隊員は気力を失い、ノルマ達成を収容所全体で五〇〜六〇%台で放置して、我々人類の師である偉大なソビエト連邦人民共和国の恩恵に対して応える姿勢ではない。自己批判せよ」ということになって、強制的に「私は偉大なソビエト連邦人民共和国の恩恵を受けておりながらそれに応えないで、隊員が気力を失いノルマ達成が落ち込んでいるのを放置して遊んでおりました。まことに申し訳なく、心よりおわび申し上げます」と自己批判すると、隊員の中から罵声が飛び、逐次エスカレートして「バ

カヤロー」「裸になれ」「四つんばいになって皆の周りを回れ」ということになってしまった。特に今まで気力を失っていた者まで罵声を飛ばし始めた。そこで将校さん達は裸にさせられ、四つんばいになって「ワンワン」「ハイハイ」と言いながら集合隊員の周りを回った。

④ 将校分隊

そこで最終的には将校分隊にさせられて、毎日我々と同様に山に行き、あまり習熟の必要のない道路作業を行うようになった。国際条約では将校は肉体労働にはつかせないことになっているそうだが、それを無視して実行された。

⑤ 我々小隊長も自己批判

私ら小隊長も、今まで隊員が黒パンに水増しをして重湯状にして飲むようになって栄養失調となり、気力を失い、ノルマ達成ができなくなったことへの自己批判をさせられ、一般作業員に格下げになった。そこで小隊長、分隊長は選挙で選出された方々になった。又、自己批判させられた者は

皆、集合隊員の中央に置かれて「憎しみのルツボ」という歌を全員で合唱して責めるということが行われ、今まで親しくしていた自分の小隊隊員で私を睨みつける人もあって、私は理解できない気持ちになった。そのため小隊長には自害された方もあった。

⑥ノルマの異常な上昇

そこで、毎日の朝礼時には、昨日のノルマ達成に対して最下位の作業長は自己批判をさせられ、全員の前の壇上に立たされ「私の作業隊は、昨日のノルマ達成が收容所の最下位で八五%でありました。これは私も人類の師であるソビエト連邦人民共和国に対しまして誠に申しわけありませんでした。今日は一〇〇%を必ず達成して来ます」と宣言させられた。となると、最下位の作業隊が一〇〇%達成して来るので、一〇〇%では又、我々も最下位で自己批判させられることになる。従って必死になって作業をするようになった。そのようになつて、收容所全体の最高では平均で三一

三%まで達した日があり、又作業隊では三八〇%を達成して来るのも現れた。

⑦隊員の人間関係が悪化した

このような状態になると、気力を失っているような状態は昔のこととなり、皆重湯等を作る時間どころではなく、昼食をする時間も惜しんで仕事をして体を休めることができなくなり、非常に全員が疲労困憊して、愚痴をこぼすようになった。お互いに「あいつが動きがのろいのでちよつとも能率が上がらない」と隊員で他を批判するようになり、人間関係がギクシャクして隊員内の絆が悪化してしまった。なお、作業ノルマは個人ではなく分隊単位で行われ、検収して計算される。仕事の内容が共同作業で、以前（收容所内革命以前）は皆、和気あいあいの空気に満ちていたが、異常に仕事を強要されたために不調和を招いてしまった。しかも、このようなノルマ上昇は收容所内で行われたことで、ソ連人は一切関与していないのだ。又軍隊の時のような統制は以前から大分弱く

なつて来た。それでも、氣力を失つた時でもそれが保たれていたが、この度の改革で皆平等の考えが出て来て、言いたい放題の状態になって、一つにまとまって分隊長の指示通り動いていた時のようにいなくなつた。

⑧ 宿命の建設と発電

このように作業成績が上がつたので、前述したように報酬をお金で収容所が貰うようになった。どの位の金額であつたかは民主委員が掌握して、我々には報告がない。それで、そのお金で製材した木材、金具、道具等を購入して、奥深い山中に新しい我々の宿舎を休日を返上して建てた。更に蒸気機関車及び発電機まで購入して薪を焚いて発電し、各室に電灯をつけた。更に各部屋内壁に石灰液を塗つて白色にし明るくした。又共同風呂、高温蒸気蒸しによる消毒小屋(シラミ退治用)、屋外劇場と丸太椅子を並べて観覧席を設けた広場等々の建設を、同様休日を返上して行つた。なお、大工の経験のある隊員は山へ行かないで内勤とな

り、その手下の隊員等計七、八人が内勤に追加された。これはノルマが三〇〇%台に上昇すると内勤者数を民主委員が自由にすることができたようだ。

⑨ 洗脳教育について

電灯を点し、白壁の明るい室で、夜七時半までに夕食を済ませて、各部隊ごとに夜十一時頃まで勉強会をさせられた。昼間は三〇〇%台の作業で働き、皆くたくたになつてくたびれ、眠いのを我慢してそれに臨んだ。モスクワ大学編集による日本語版で「ソビエト連邦人民共和国」「弁証法的唯物論」「レーニン・スターリン」等々数種類の、一冊三〇〇頁に及ぶ立派な本が各小隊に一冊あて配布されて各分隊ごとに回し、誰か一人指名された人が一、二頁位それを読んで、全員がそれに対して感想を一言ずつ述べる方法で行われたが、ソ連に対し批判的言葉は出せず、ほめたたえることのみ述べる雰囲気では何か違和感があつた。このように毎晩洗脳教育が行われた。

十、帰還

①私は收容所内勤にされた

イ 昼間は三〇〇%台の重労働の仕事で、夜は洗

脳教育と縛り返すうちに皆、疲労困憊して来た。

私はそれが原因と思われるが食事ができなくな

って医務室へ行くと、体温が三七・五℃を示し、

その日は仕事をしなくてもよいことになった。

三六℃に下がると仕事に行き、三七℃以上に上

昇する、休めば平熱になるを繰り返していると、

医務室の計らいで民主委員に申し出されてソ連

收容所の許可になり、所内勤にされた。

ロ 作業日報の作成業務

私は作業日報作成の仕事を毎日するようになった。

それは、ソ連の山男からメモを受け取り、昨日の各分隊の作業量を計算して日報を作り、山男

に返却する仕事である。これは各分隊別、各小隊

別、收容所全体の作業量とノルマ達成率を表にま

とめたもので、山男のソ連人が交代し別の人が来

てから、検収に山へは行くが計算はしない（でき

ない？）人だったので、私がロシア語を少しばか

り小隊長時代に覚えたので話を通じることから私

が指名された。最初、以前の報告書を見せてもら

ったがまるきり計算違いで、加算も位取りを間違

えているようだった。これを山男に言うと、「あま

り騒ぐな、このままにしておけ」ということだっ

た。このような間違いは私が見ただけでも六割は

違っており、木材伐採のスターリン五カ年計画の

達成量として中央に報告されるが、とても「おそま

つ」なものであることを知った。

②ダモイまでの状況

内勤になって、いつもの通り計算をしていると、

ソ連の将校でいつもとは違う人が入室して、急遽

二百人を集めよと言って「時間が無い、早く早く」

と急ぎ立てた。仕方なく内勤者（食事準備作業員、

ノコの目立て作業員、斧の研ぎ作業及び私を入れ

て十二人）しかいないので皆、手分けして各山ま

で伝令に行ってもらった。片道でも四十分は必要

で一時間半はかかると言いましたが「それでは間

に合わない、もっと早くせよ」と言いますがどうすることもできず、それでも一番早い隊が一時間で約八十人帰って来てくれた。そして、お前もこの車に乗れと言われてトラックにりましたが、どこかの緊急作業に出され又帰って来るもの思っていた。将校に尋ねても「俺はわからない。駅へ三時までに行かねばならない。早く早く」と言われ、私物は一切持って来られませんでした。私は特に遺骨の箱を二個持っており、小隊長時代の住所録を作っておりましたが、それすら持って来られなくて今でも心に痛く残っている。

③ダモイをいっどこで聞いたか。

トラックに乗り、マンゾフカ駅には（九月十二日）汽車が待っていた。汽車は有蓋車（馬や牛を運ぶ車）で中で同僚等と話したが、どうも様子がおかしいぞ、帰れるかも知れないぞと汽車の方向からして思った。九月十五日ナホトカに着いて、初めて我々は帰れることを知った。

④集結地ナホトカ（九月十五日）

身体検査、持ち物検査、思想的な質問は各個別（民主委員の日本人により）に行われた。それらの検閲があつて、この検閲で長期にわたり残留しておられる人があると聞いた。

⑤乗船名

昭和二十三年九月二十一日「山澄丸」乗船

⑥船内生活

海は非常に穏やかで、鏡の上を滑るようにして日本海を渡って帰る事ができた。私は前述したように遺骨と隊員住所録を持って来られなかった。これが心残りで、非常に残念に思っており、船中は紙がないので船の中で頼んで食糧の紙袋をもらい、そのことを思い出しては書いていた。

⑦上陸地

舞鶴港 昭和二十三年九月二十四日

舞鶴引揚援護局で手続を行う

十一、帰国後

①昭和二十三年十月

株式会社大隈鉄工所入社

②昭和五十一年二月二十七日

同社退社

③連合軍司令部より出頭命令

昭和二十四年四月二十日～二十五日の五日間、私が下士官で小隊長をしていた関係で出頭を命ぜられ、三カ所の收容所の抑留状況と周辺道路状況と道路網について説明を求められた。

十二、抑留生活を今思い出して想うこと

①ソ連山男との会話

私は、ソ連の山男とは検査時に、案内して各地で作業し、用材の検収に立ち会いますが、特に二回目のアントノフカ山中收容所の方とは親密になり、休日に私を呼び出してくれまして、彼の家で昼食の接待を度々受けて互いに話し合うようになりました。私はこの山男との会話で少しロシア

語ができるようになりました。そのようなことから毎朝会う時には彼の方から近づいて「おはよう」と言いつて握手を求めてくるようになり、私からも近づいて行くようになりました。彼の家で話し合うことで色々なことを知り、我々日本人を褒めたたえてくれたことが印象に残っております。断片的ですが、次に示します。

この地方の松の巨木はこの限られた一部の場所ではなく貴重な存在です。北の方や西方のモスクワ地方へ行ってもその途中でも、一メートルもある巨木はここしかなく、ここは海（日本海）に近く温かい低気圧が来てくれて雨量が多く、同じ沿岸地方でも北方のハバロフスクでは気温も低く南からの低気圧が来ないので雨が少ない。それで大木と言っても三〇～四〇センチ位で、こんな巨木は一本ありません。

それで我々は、ここしかない巨木の伐採作業をしていることを知りました。

帰国後、他の收容所で伐採作業をしていた方々

と会いましたが、最大で四〇センチくらいで、一メートルもある巨木は扱ったこともないと言われ、山男の話は正しかったと思います。「この巨木を見事に処理してくれているのはお前さんたち日本人だけだ」今まではソ連の囚人やドイツ軍の捕虜等に来てもらったが、事故死が多発して仕事にならず帰ってもらった。我々ソ連人もこんな巨木の伐採をどのような方法で行えば良いか、マニユアルもなく見当もつかなかったが、何一つ文句も言わないで、グループが一致協力し合ってきちんと仕事をさばっていく様を見せてくれて驚いている。日本人はすごい」などと言われました。

又、この男の家の小屋を建ててくれたと言われ、私の小隊が指名されましたので、大工の経験者と手元の作業員数人に行ってもらいまして、「見事にすばらしい家を建ててくれました。ありがとうございます」と言われました。

例えば丸太二〇センチ位のを、ここにないのので他の所から運んで来て、これを積み重ねて壁にす

る場合、その傾きができないように正しく垂直に重ねて行くよう簡単な定規を作って建ててくれる様を見て、「これ又、日本人はすごい」と言ってくれた。又、大工道具でこの地方にない「ノミ」をこの山中で作ってしまう姿を見て驚いていました。

例えば、コークスで赤熱したストーブを使用した他の「ノミ」を赤熱させて、たたいて別の「ノミ」に加工し焼きを入れて手動のグラインダーで仕上げ、砥石で磨いて、この地方では手に入らない「ノミ」を作ってしまった、細かいところまで手の込んだ仕事をして小屋を建ててくれた日本人の手の器用さは、我々は真似ができない。すごい人種だと思う、と語っていました。

②大粒の「松の実」について

松の巨木には大粒の松の実がありまして色々な思い出があります。この地方には直径が十五センチ、高さ三十センチ程の「松かさ」が枝についております。魚の鱗のように松かさの葉が一枚一枚交互についていて、その葉の中には松の実が入って

いて、それが大きいのです。ちょうど、落花生よりも少し大きめの実が殻をつけて入っています。

日本の内地でも松の実が売られておりますが、実が小さく北朝鮮産のようです。この南沿海州での巨木の松の実は、それより三倍位大きく味も全く異なり、大変香ばしいのです。

殻の状態にして火にあぶって焼くか、又は松かさの葉のみを斧で削り取って焚き火の中に入れて焼きますと実を取り出しやすく、黒くなった松かさをたたいて碎けば実を取ることができて、皆、好んで食べました。

けれども巨木を倒すと、その周囲約三〜四キロメートル位まで倒れる音が伝わりますので、警備兵がどこからともなく袋を担いでやって来て、松かさ全部持つて行ってしまいます。この松の実は高級な嗜好品で、モスクワの外交の場や、高級なレストランで出されるそうで、町へ持つて行けば高価な金になるので、警備兵は小遣い銭欲しさにやってくるのです。

松の巨木が倒れた音の方に向かって探します。木を倒したらすぐ全員で松かさの実を取って、隠してから作業を始めます。しかも、警備兵は松かさを自分で袋へ入れないで、我々に取らせて「袋に入れよ」と言うのです。自分は、マンドリン銃を抱えて見ているだけです。

まことにいまましいのですが、仕方がないのです。まだ、松かさを持つて行くのは良い方で、時には「松かさを砕いて実だけを袋に入れよ」と言うのです。これは時間がかかり、仕事ができなくなります。そこへ私が出くわした場合には「それではノルマが達成できなくなる。松かさのまま持つていけ。さもないと、お前の将校に報告するぞ」と言いますと、しびしび松かさのまま持つて行きました。

③私共は悪性のアメーバ赤痢に感染したが木炭を食べて助けられた。

イ ブヤンキー山中収容所の惨状

ブヤンキー山中収容所は、五百人のところへ三

百人が編入されて計八百人の収容所になった。当初は八百人の人員であったが次々と死亡して、我々がその穴埋めに編入されたことを知った。当初は気が付かなかったが、便所へ行くと（外に溝が掘ってあって板二枚が渡してあり、板に両足を乗せて用を足す）血便が至るところにあるのだ。一カ月半位して、編入した我々三百人全員が悪性のアメーバ赤痢にかかってしまった。悪性のアメーバ赤痢は熱はなく、下痢が激しく、粘液便から血便となり脱水して衰弱し死亡していく恐ろしい病気である。大陸の人々はほとんどアメーバ赤痢の免疫を持っていて発病する人は少ないそうだが、我々日本人はそれがなく、すぐ感染して発病しやすく、薬も持参のセイロガンが底をつき、医療室へ行っても薬はないと言われ、しかも熱が出ないので病人と認定してもらえない。したがって休むこともできず、仕事に出ればノルマは一人前に計算されて仕事を課せられるので苦しんだ。

口 炭を食べて命が助けられた

ほとんど全員が感染してしまい、どうなることかと思っていたが、私の小隊の元衛生兵さんが「炭を食べれば治るかもしれない」と言い、初めはそんなもので治るか？ と思ったが、溺れる者は藁をも掴む思いで、最初、私と数人の者がそれを試してみた。これは松の木を燃やし赤熱させ、水に漬けて消し炭を作り、それを砕いて粉にして毎食後、茶碗一杯位食することで、約一カ月後に完全に治癒できた。約十日位で下痢が止まったので所長に報告進言して、収容所全員が木炭の消し炭を食すようになって全員が助かることができた。私は当初、ここで命を失うかもしれないと思い恐怖を感じたが、助けてもらうことができた。

④極限状態での体験

人は氣力を失うと簡単に死に至ることを知った。人は苦しみ、悩み、迷いながら、それをどのようにして乗り越えるかを考えて対策を練るのは、常に氣力を養うことができて自分があつて生きていると思う。私は抑留中、常に氣力を失

わないようにいつもそのように苦しみ、悩むように、又その対処の仕方について考えねばならぬ状態に置かれていたから、死亡することなく生きて帰ることができたと思う。これは私を導いて下さっている大いなる力が働いていたと思わざるを得ない。私は牡丹江まで真夏の暑い中を約一カ月間歩いた時、水が全くなく、どぶ水を皆競って水筒に入れ、毎日それを少しずつ飲んで歩き腹をこわした。牡丹江での検査で隊から除外され、所属していた幹部候補隊と分離され、残留にされて小隊長（九十〜百人の小隊）にされた。昭和二十一年四月までその牡丹江の陸軍病院内で過ごし、健康が回復した者三百人を三個小隊に再編成して入所した。責任者の苦しみ、悩み、隊員同士の争い仲裁、隊員が氣力を失う、作業ができなくなる等々のように、私を導いて下さったから生きて帰ることができたと思う。

ロ 長期にわたった特殊な環境

又、この世はみな男と女があって、それぞれ氣力を湧き出し合って調和のある生活ができていて、人間は生成発展していると思う。特別に自らが大きい目的を持って山中に入り修業されることとは違って、異国の地で、しかも人里から遠く離れ、見渡す限り奥深い山中で、時々熊が出る所で抑留という強制的な重労働で働かされ、日本へ帰れる情報は全くなく、夢も目標（内地へ帰ってからの）も断たれ、又酒もなく女性を見ることがすらなく、娯楽は何一つない男ばかりの特別な環境の状態が長期にわたって働かされ、隊長から指示された通りの仕事をすればよく、又働いても働いてもその報酬もなく牛や馬のように扱われていると、人間として生きている実感が全くない。すべてが単調な状況にあると、人間は皆、ある種の欲求不満を持つようだ。

ハ 欲求不満とそれにまつわる結果

このような状況下になると、人は皆、欲求不満を満たすために何か変わったことをして楽しみを

作ろうとする。それが配給された食物（主に黒パン）を水増しして飯盒いっぱいにして、ぐつぐつ煮て、木の葉や新芽を混ぜて重湯状態にする。又、各自特有のスプーンを作って熱い重湯をすすり飲み、腹いっぱいになって満腹という満足感を味わって寝るといふ状態が発生した。初めは他の小隊で始まっていたが、忽ちにして收容所全体に広まり、約八〇%の隊員がそれを行うようになった。私ども小隊長同士は、精神的欲求不満がこれですりでも癒されるのではないかと話し合っていた。又、その位の楽しみがあっても良いではないかと思っていた。

二 栄養失調

けれども、それがそうでなく、食道、胃腸の内壁を侵し、ただれて胃拡張となり、腹部だけふくらんで、栄養が吸収できなくなり、逐次、栄養失調になり、やせ細って体重が減り、体力が段々となくなった。足が上がらなくなって小さな石ころで倒れ、山へ行くのがやっとの事となって、作業

どころではなくなった。

ホ ノルマ達成ができなくなる

以上の状態になって作業員の約八〇%の隊員が氣力を失い、作業ができなくなって来た。朝、やっとなの作業場へ着いても何もできない状態で、ポーと立ったままだ。冬は零下二五〜三五℃以下は毎日です。そのままにしておけば鼻の先や耳、手足が白くなって凍傷にかかってしまう。鼻の先が白くなった隊員はすぐ手でこすったりしてやった。又、私と分隊長と氣力のある隊員数人とで薪を集め、火をつけると、のこのこと隊員が集まり焚火の周囲に腰を下ろす。と、腰が上がらなくなり、一日中、無言で座ったままだ。薪がなくなっても補給する者もなく、私どもが補給した。これは、反発してサボタージュしているのではない。何かに取り付かれた状態になってしまった。

そのような状態になったので、ノルマの達成が三〇%以下になると食べる権利がなくなり、食事ができなくなるので、私と分隊長、数人の元氣の

ある隊員とで何とか三〇%台を確保して、皆食事をすることができた。これは我々小隊のみでなく、すべての小隊も同じようになってしまった。

へ 責任者は夜、営倉に入る

けれども、ノルマ五〇%を割ると前述したように、その責任者（小隊長）は夕食を除かれて、夜は営倉に入れられた。昼間は山に出て仕事をし、朝食と昼食は食事ができて、夕食のみ除かれ、営倉に入る。五〇%を超えるまでその状態が毎夜続いた。営倉はちょうどロッカー状になったもので、日本人が一人立ってやつと入れる寸法にできていた。我々抑留者が造ったものである。顔の辺りに窓があり、そこから夏はブヨ（ハエの大きさ）が入り込んで体中を刺し、苦しんだ。そのような営倉の箱が十個ばかりあって。連夜とも満席の状態だった。

ト 私はブヨに体を食われ足が腫れ苦しんだ

ブヨは体中の下着の中まで潜り込んで刺すのだが、それを手で払うことも自由にできない窮屈な

営倉である。私は足部に三カ所、ひどく食われて化膿した。卵をそこに産み付けられてブヨの「ウジ」が発生してひどく腫れ、足をひきずって歩くようになり、長期にわたり苦しんだ。今でもその部分が黒色に変色して、あざになっている。

チ 私は営倉に入ること自分を見つめる時間ができ、私は生きていた

私はこの営倉に入るのには夜だけですが、月を眺め星々を見つめ、日本の故郷を想い、祖父母、母や父、弟妹を思い、涙したこともあった。そして、明日はどのようにしてノルマの数字を出すかと、そのことのみを考えていた。今思えば、もし私が皆と同じ隊員であつたら私も飯盒に水増しして体をこわし、氣力を失って死亡していたと思われる。小隊長として、責任者として考え、悩んでいたことが、私が生還できた大きな要因である。

リ 人は氣力を失うと簡単に命を失うようだ

私は、その状態を正しく表現して説明できる自信はないが、氣力を失うと、生きているのか死ん

でいるのかわからない状態になってしまふ。朝なかなか起きてくれないので「朝だ朝だ、めしだ」と揺り起そうとすると既に死亡している状態であった。苦しまず、悲しみもなく、隣で寝ていた者も気がつかず、知らぬ間に亡くなっていて、その方々を荼毘しなければならぬ悲しい思いを重ね繰り返した。

又 氣力を失った隊員を病人にしてくれない

しかも氣力を失うと熱も出ない。ソ連では抑留者に対して、体温が三七℃を越えると病人として認定してくれて仕事をしなくてもよいが、他は医務室で（ソ連の管理で）病人にしてくれない。又腹をこわして下痢をしても、それにより氣力が低下していても、熱が出なければ一人分の隊員としてノルマが課せられて計算されるので、皆苦しんだ。その当時、私は氣が付かなかつたが、今考えると、氣力を失って衰弱した方は、脈拍も体温もむしろ通常より恐らく低かつたのではないかと思う。

ル 悲しくてやりきれない気持ち

抑留中、このように氣力を失った方々は、年齢的に隊員の中でも年長の方で三十歳前後の方が多く、お嫁さんや子供さんもおられる現地召集（満州におられた方）が多かつたと思うが、その家族の名前等と呼ばれるようなこともなく静かに他界された。私は、この方々がこの世にせつかく生まれて生きて来られたすべての意味がなくなるのではないかと何かやりきれない気持ちになり一層悲しくなつた。「又昨夜〇〇さんが亡くなつた」と隊員に知らせても、氣力のある隊員の中には手を合わせてくれる方もあつたが、氣力を失つた隊員は反応がなく、我関せずの状態で、これ又やりきれない気持ちになつた。

又 私どもが体験した収容所は特別な状態であつた

以上のような体験は、他の収容所内で抑留生活をされた方々には、そのような極限状態になつた事がなく、私どもがいた収容所のみが遭遇した特

殊な状態であったことを、帰還して色々な方々の
抑留者とお会いしてお話を伺い、知った。

十三、私を常に導いて助けていただきました大い
なる御方に心から感謝を申し上げます。

私は「我思う故に我あり」のことわざは真実で
あると思うのですが、「鶏が先か卵が先か」のよう
に「我あるが故に我思う」かもしれません、「我
思う」も「我あり」も、いずれもその以前に私を
常に助かる方向に導いて下さった大いなる御方の
おかげで「我思う」ことや、あるいは「我あり」
の状態にしてくれたから助けていただけだと思う
のです。なぜならば「我思う故に我あり」をよく考
えますと、八百人の収容所全員が悪性のアメーバ
赤痢に感染して次々と他界されることになり、三
百人の尊い命が失われました。だれ一人として「炭
を食べる」ことに気がつく人もなく、そこへ私ど
も三百人がその補充で編入させられまして、私ど
もも次々と感染してしまい、このような状態にな

っても「ソ連」当局では病人とは認めないので。
何度交渉しても体温が三七℃を越えない限り病人
ではない。又アメーバ赤痢なんて、そんなもの病
気でない、薬はないと言われました。私は常に忙
しく飛び回っていて、常に自分を自覚して「我思
う」の状態でありましたが、感染してしまいまし
て血便が出るようになって、ここで死亡しなければ
ならないのかと古里日本を想い肉親を想って、
悔しいが死を覚悟をしまして「我あり」の状態で
はなくなっていました。

けれどもちょうどその時、我が小隊内の元衛生
兵長が「炭を食べると治るかもしれない」と初め
て提言していただいたことにより、私も収容所全
員も「炭を食べて」助かることができました。私
は助けられた後に元衛生兵長さんに問いますと、
「別にそのような事を聞いたこともなく教育され
た事もなく知識ありません。ただ、山で仕事が
終わって焚火をした後に火を消すために水をかけ
てできた消し炭を見て、手に取って直感的に、こ

れを食べたらもしかすると治るかもしれないと思
いました」「なぜなら、乾電池のマイナス極は炭素
棒ですから、これを腹の中へ入れるとマイナス極
の雰囲気にする事ができるかもしれない、もしそ
のようになれば、菌はプラス極内では活発になっ
て盛んに繁殖しますが、マイナス極内では活動が
抑えられてしまいますから、これを食べると菌の
活動を弱らせることができないうかと思っ
た」と言います。彼は、自分も血便が出て、この
ままでは死に至る事を知り、衛生兵として常に衛
生的に物事を見たり考えたりして、絶えず、その
思いの中に入り込んで集中されていたので、これ
を食べると助かるかもしれないと直感されたと思
います。又、彼は初め、分隊長に申し出たが、「そ
んなもので治るもんか」と蹴られてしまって、私
（小隊長）に提言してくれたのです。これは天の
助けか分かりませんが、大いなる御方のお導きが
あって「我あり」の状態にして助けていただいた
としか思えません。

又、「我あるが故に我思う」の場合につきまして
も同様に、よく考えてみますと、飯盒に水増しし
て熱い重湯を作り、自作のスプーンですすり飲ん
で食道を侵し、栄養失調となり、いくら「我あり」
状態であつても、氣力を失い多くの方々が「我思
う」の状態でなくなつて、生きているのか死んで
いるのか、どうかわからない氣の抜けた状態に落
ち込んでしまい、「朝だ、めしだ」と揺り起こすと、
すでに他界されていたのです。隣で寝ていても氣
づかず、そのようなことが次々と起こり、悲しい
思いを繰り返しました。私は忙しく飛び回ってい
て、飯盒に水増しして重湯を作る暇は全くなく、
又、そのようなことができる立場ではありません
でした。常に「我ある故に我思う」の状態に導い
ていただいていたからだと思います。これは決し
て偶然ではなく、大いなる御方のお導きによるも
のであるとしか思えません。心より感謝申し上げ
ます。ありがとうございます。

十四、シベリアの地で他界された御霊様方みなたまさまが成仏
されますように、心からお祈り申し上げます。

私は、ここに、シベリアの地で命を失われた多くの御霊様方が、古里日本へ帰られ、それぞれの御先祖様方に迎えられてお幸せな御霊様に発展され成仏されますよう、心よりお祈り申し上げ、稿を終わらせていただきます。

流 転

大阪府 藤原栄暢

敗戦直後（昭和二十（一九四五）年八月下旬）、陣相屯飛行場から安東まで行けば何とかなると言つて脱出した第八野戦廠の五人は鴨緑江（国境）をうまく渡れたのだろうか。朝鮮へ入れば日本内地へ行く閤船が出ているとか。荷物をもうこれ以上持てない程持つて逃亡した者も、ソ連兵、満人、朝鮮人、という順序に略奪されて、履いている靴まで取られて命からがら逆戻りという連中もいたので、逃亡の決断はちゆうちよせざるを得ない。昼は寝て夜の行軍という目立たない方法で歩いて少しでも日本に近づこうと出発する組、このよくな状況にあっても色々な情報や噂が意外と早く、また割と正確に伝わるものだ。対空無線分隊の脱出組は、途中、満人達の暴動に遭遇して皆殺しに遭ってしまった。